

昔々、二人の子供がいて、彼らはこの世で最高の友人同士だった。彼らはすばらしく理解し合い、いつも一緒だった。二人の子供はある日、大層な額のお金を見つけた。喜んだのはいいものの、その金をすぐに使ってしまうのが心配になった。そこで、それを使う前に、隠し場所を取っておくことで話がまとまった。彼らは森の奥地まで行って穴を掘り、お金が傷んで台無しにならないように包み、それから全部を埋めた。誰も彼らが森に入った姿や、奥地から戻ったところを見ていなかった。

時が過ぎ、二ヵ月後、二人の子供のひとりがこっそりと森に行き、お金を掘り出して立ち去った。彼はお金を好きなように使ったが、それは親友と一緒にではなかった。少し経ってから、もうひとりの子供が友人に言った。

「ちょっとお金を見に行ってみようか。かなり長い間そのままにしておいたので、もう使っても大丈夫だろう」。

もうひとりは答えた。

「それじゃ、見にいこう」。

彼らは、隠し金を埋めた場所に着いて、そこを掘ったが何も見つからなかった。彼らは一緒に、誰が彼らの金を盗めたかつきとめようと考えたが、隠した時に見られていなかったからには、誰も取ることは出来ない、という結論に至った。それで、二人のうちのひとりがもうひとりの盗みを咎めた。言われた方は、自分じゃないと反論し、長い間森の中で口論したが、解決しなかった。お金を盗んでいない方の子供は、金を盗んだことで友人を訴えることに決めた。訴状が友人のところへ届き、二人とも裁きの場に向かった。原告の弁護士が被告を問いただした。

「あなたたち、君とその友は、金を有していたが、それを森の中で一緒に埋め、誰もあなた方がそれを置くのを見なかった。そして、しかじかの時に、それを見にいこうと取り決めた。時が来て、金はそこにはなく、君の友人は、君以外にそれを使い得る者はいないと考え、そう主張している」。

言われた子供は、それらの事実をすべて否定して答えた。

「すべて間違いですし、私はこの男を知ってさえいません。私は彼とお金を埋めたことなどなく、彼が置いた場所すら知りません。彼が訴えの中で主張していることはすべて作り話です」。

弁護士は証拠がないので、事件を解明するために、何とか証拠をひとつ見つけようとした。そこで彼は依頼人に頼んだ。

「森に戻って、穴を掘り、穴をちゃんと確認したかどうか、思い違いではないかどうかを見てから、私に報告しなさい」。

子供はそれを実行した。15分ほどしてから弁護士は自分と留まっていた被告に尋ねた。

「彼は金がある場所からまだ遠いかね？」。

少年は答えた。

「遠いです。ずっとずっと遠いです！」。

弁護士は黙って、被告の言ったことを書き留めた。

もう少し経ってから、彼は再び尋ねた。

「さて、彼はもうその場所に近いかね」。

被告の少年は答えた。

「普通なら、殆どそこに着いたはずです」。

弁護士は、それも書き留めた。しばらくして、子供が森から、金を持たずに手ぶらで戻り、相変わらず、彼の友人が金を盗んだと言い立てた。

弁護士は被告の方を向いて彼に言った。

「金を探しに行きなさい。それからそれを君の友人と分けるために戻りなさい。何故なら君が金を取ったからだ」。

「でも、どうしてそういうことをあなたは言うのですか？ 私ではありません」。

「聞きなさい。君の友人が森に出かけてから、私は君に、その場所がここから遠いかどうか尋ねたら、君は自信を以って『とても遠い』、『彼はまだ着かない』と答えた。ところが、ついさっきは、君はそれと反対のことを言った。だから、君は自分が彼と一緒に金を埋めたことを白状したのも同然なのだ。君が金を盗んだのだ！」。

被告は、もう嘘をつくことが出来ず、盗みを自白した。

この話の教訓は、もし事件が複雑で証拠がなくても、それ引き出すことが出来るということ、つまり、行き詰まりの状況でも、解決を急がず打開することが出来るということである。